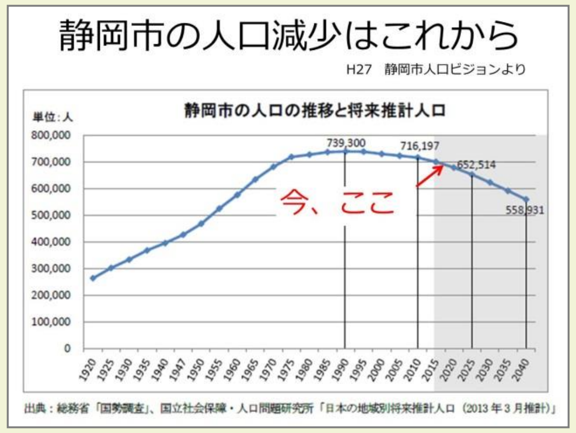
平成29年度静岡市協働パイロット事業

しずおか自治取組発表会 2018冬

少子高齢化の今だからこそ地域自治そして学び合いを

静岡市は今後、急速に人口減少と高齢化が進み、同時に税収の減少と、社会保障費と公共施設維持費の増加による財政難および行政サービスの低下が生じることが予測されています。つまり、何でも行政にお願いという状況ではないのです。
一方、市内各地域を見渡してみると、人口減少と高齢化の先進地オクシズでは各地域のニーズに応じた小さいながらも、住民主体の様々な取り組みがなされています。全国各地に先進事例はたくさんありますが、まずは、同じルールのもと、すぐに聞きに行ける市内の事例を学び合うことが重要だと考え「しずおか自治取組発表会」を初めて開催しました。



地域を変えることができるのはそこに住む人

地域の課題を最も把握しているのは行政職員でも専門家でもありません。地域に暮らす人々が感じている課題に対して自らが立ち上がり、試行錯誤を重ねていくことが、課題解決へとつながり、暮らしやすい地域を作っていくことになるのです。（里山くらしLABO）

関心の高さが伺える！120名が参加！

発表会当日は、静岡市内の自治会役員や関係者はもちろん、静岡県議のみなさまや、市議のみなさま、そして行政や社会福祉協議会の職員、伊豆市からバスで、また遠く神奈川県や石川県からも参加がありました。

「しずおか自治取組発表会」
平成30年1月21日（日） 13:30〜16:00
場所：薬科生涯学習センター2Fホール

〜当日の次第〜

1 開会挨拶
2 趣旨説明
3 取り組み発表など（前半）
　高校生から見た地域①（梅ケ島地区）
　自治活動の見直し（清沢地区）
　「学童がない」を解消（大川地区）
　自治会役員に女性を（梅ケ島地区）
〜休憩・各地の名産お茶請け付〜
4 取り組み発表など（後半）
　発表3地区への質問、回答
　高校生から見た地域②（玉川地区）
　高齢者への配食（玉川地区）
　バスの自主運行（両河内地区）
　中山間地のママの孤立を防ぐ
　発表2地区への質問、回答
5 総評

主　　催：静岡市（市民局市民自治推進課）
企画運営：里山くらしLABO(labosatoyama@gmail.com)
（人口減少がすすむ中山間地域において、持続可能なコミュニティづくりを支援する任意団体。
地方新聞46紙と共同通信が設けている「第8回地域再生大賞」において特別賞を受賞）
問い合せ：054-221-1265 (市民局市民自治推進課)

未来を担うゲスト

静岡県立農業高校
チームオクシズ
梅ケ島＆玉川

梅ケ島と玉川に生まれ育った高校生をゲストに迎え、未来を担う彼らから地域の魅力やこうなったらいいなと思うことを交え、各地域について発表をしてもらいました。

左から小泉君、星野君
内野さん、白鳥君

梅ケ島地区からは保育園から共に育ち、寮生活の今も部活動まで同じ同級生二人組が登場。地域を離れた今も、歴史や温泉があり自然豊かで特産物に恵まれた梅ケ島が大好きだと発表。人口減少には移住促進や、観光客の誘致を進めるべきだと語り、自分たちは将来、地元の建設や森林整備を担うようになりたいと未来について語りました。
玉川地区からは男女二人が登場し、小規模校ならではの教育の魅力や、新旧さまざま魅力的な取り組みが地区で行われていることを紹介、自分たちが出来ることは、積極的に地域の祭りに参加することや、在来作物の研究を進め、玉川の農業に活力を与えることだと語ってくれました。

同級生の二人が梅ケ島の魅力と未来について語ります

対岸の鹿の飾りを打ち落とす水神祭は玉川の伝統行事

奥藁科の子育て
サークル
奥わらママ

少子化が進む藁科川流域で大川、清沢、中藁科の自治区をまたいで活動するママグループが発表。

人のつながりがあるように見える中山間地こそが、実は人口減少が進み広い地域に母親が分散しているため、支援が届きにくく孤立がすすみやすいのだと説明。携帯を使い地域のママの横のつながりを生み、地元自治会の協力を得て居場所作りをしたり、より子育てしやすい地域作りのためのこの地域の暮らしのガイド作りなどを行っている。

自らが動くことで、地域の方の理解を得て、環境が変わっていくことを教えてもらったと語る奥わらママ副代表、森さん。

来年もぜひ開催を！

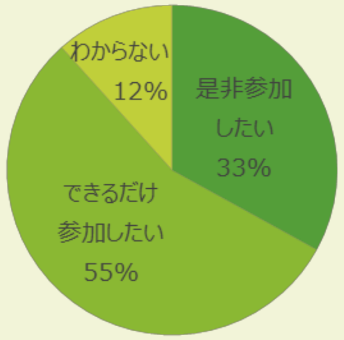
静岡市自治会連合会　瀧会長より総評をいただきました。

≪静岡市自治会連合会　瀧会長≫
静岡市内の各所で様々な活動をしている人が沢山いることを知れて、感動しました。特に高校生がここまで地域について考えているのだとは知らず、大変勉強になりました。ぜひ大人になったら自治会活動へ参加をして欲しい、特に女性は歓迎ですと締めくくり、発表会の継続を希望、他の地区の取組はもちろんのこと、オクシズにもまだ取り上げられていない素晴らしい取り組みが沢山あるので、そちらもあわせて発表してもらいたいと語ってくれました。

≪静岡市市民局　豊後局長≫
発表者と参加者がひとつになり、双方向で交流できたことが、とてもよかった、ぜひ自分たちの地域へ持って帰り参考にしていただけたら嬉しいと語り、中山間地の子育てについては、イメージ先行であったことを大川や奥わらママの発表から知り、市の職員として今後もより深く考えていきたいと語り、みんなで一緒に静岡市を盛り上げていきたいと挨拶をしました。

【参加者アンケート】

Q：来年も開催したら参加をしますか？



Q：満足度は100点満点のうち何点ですか？

参加者満足度 平均88点

アンケートから、同様の課題に悩む参加者が、身近な地域の参考になる事例を聞くことは、満足度を高め、さらに自らの活動を見直す機会にもつながることがわかりました。

≪参加者の感想≫

地域の事は地域に住む人が一番よくわかっていて、何か行動を起こすのは地域の人でなければならないということを改めて感じた発表会でした。

自治会のイベント等に参加していますが、役員等については二の足を踏んでいる自分がいます。少し考え直したいと思いました。

とにかく現状をなんとかしようとする行動するということの大切さを教えていただきました。

本当に困らないと動かないのが現状、町内会活動に無関心な人を動かすヒントになりました。

発表自治会の展開後の発表をもう一度聞きたい。

静岡市内中山間地の優れた取組を発表

清沢　地域活動の最適化

人口約1100人の清沢地区では、年々人口が減り高齢化も進んでいます。そこで課題となっていたのは、地域活動の多さでした。見える化をするために各団体の活動を一覧にまとめたところ、903の活動と316もの役職があることがわかりました。

清沢地区自治会連合会、前田会長と、前会長の尾崎市議が登壇。自治活動を減らすこととポイントについて話をしました。

前田会長が中心になり、有志による検討会を開催、清沢地区の７大行事を再点検。点検結果も踏まえ、町内会やPTA、地区社協など40以上ある地域の団体に、次年度計画の見直しを働きかけています。結果、活動の内容を見直す団体や、会議を減らす団体もでてきています。自治会連合会では、今後も毎年活動の見直しを続けていきたいとのことでした。

コツは有志を募り、複数年検討できる人たちを集めること。そして、出来るところから変えていくこと、そして地域への報告を忘れないことでした。

ちょっとひと息

休憩時間には、各地域自慢の特産物がお茶請けとして登場。

清　沢『清沢よもぎ金つば』
梅ケ島『梅コロッケ』
玉　川『玉ゆらまん』
大　川『赤かぶ漬け』

なかには梅ケ島以外ではあまりお目にかかれない「梅コロッケ」も登場。梅ケ島の高校生のおすすめです！

大川　学童がない?!を解消

移住促進の取組が進む大川地区には、17人の小学生がいますが、そのうち9人は移住世帯です。近くに祖父母がいない、祖父母も働いている、隣の家が遠くて一人の留守番は心配…など、大川地区では、放課後に子どもを預ける場所の確保が大きな課題となっていました。

学童の確保に母親たちが自ら立ち上がり、平成25年に地域住民の協力を得て平日子どもたちを預かる放課後子ども教室「大川やまゆり教室」を開始。その後、長期休みについても検討し、料理、体操、バレエなどが体験できる「イベント型保育」として平成26年から試行。平成28年夏から通常学童へと枠を広げ「大川学童保育」を実施しています。課題となっていた資金繰りは、参加費の徴収以外に地区からの寄付金や、保護者の手作り品の売上を用いることで使いやすい価格に抑える努力を続けています。

既存の制度の利用を検討するも「大川に暮らす子どものしあわせ」を追求した結果、保護者が運営しながら地域の力を借りて子どもの預りを行う、大川独自のスタイルを生み出すことにしたのだと「奥藁科きのこの会」の永野さんと町田さんが発表しました。

梅ケ島　自治会に女性を！

梅ケ島地区は人口約500人と今回の参加では最も小さな地区です。早い時期から自治会連合会を町内単位から複数の町内をまとめたブロック制にするなど、ほかよりも早く人口減少にあわせた組織づくりをすすめていました。それでも、役員のなり手が不足しつつある現状でした。

女性が理事になることには、周囲の理解促進とていねいな調整が必要不可欠だと小泉会長は語ります。

自治会連合会の組織を活性化するために着目したのが「女性の参加」でした。自治会で検討し規約を「女性２名を役員に入れる」と変更。女性の参加は担い手不足の解消につながると同時に、異性の参加で会議の雰囲気が大きく変わり自治会活動が活性化する効果があると発表しました。女性の役員就任には、まだ調整が必要な部分が多々ありますが、来年度からの実施に向けて調整を進めているとのことでした。

玉川　高齢者の配食事業

玉川地区は1057人のうち44%が65歳以上、433世帯のうち1/3が65歳以上だけの世帯となっており、今後、高齢者独居の世帯が増え、買物や移動などが問題になると予測されています。

Refre玉川の代表で、玉川地区自治会連合会の副会長でもある安本さんは玉川の名前の由来は玉のように心美しい人が住むことに由来すると、その歴史についてもふれました。

高齢者への生活支援と産業振興のために平成28年に企業組合「Refre玉川」を立ち上げ、同時に農産物加工所「玉ゆら」もオープンしました。平成29年から一人暮らしの高齢者にお弁当を配達する、配食サービスを始めています。利用者の方からは「配食サービスがあると週に１回でも楽になり、助かる。」といった声もあがっており、今後は、現在数人の利用者の人数をさらに増やしていき、買い物支援や介護タクシーにも取り組んでいきたいと発表しました。

現在の利用者は数件ですが、小さくとも試行錯誤を重ねながら運営をしてします。

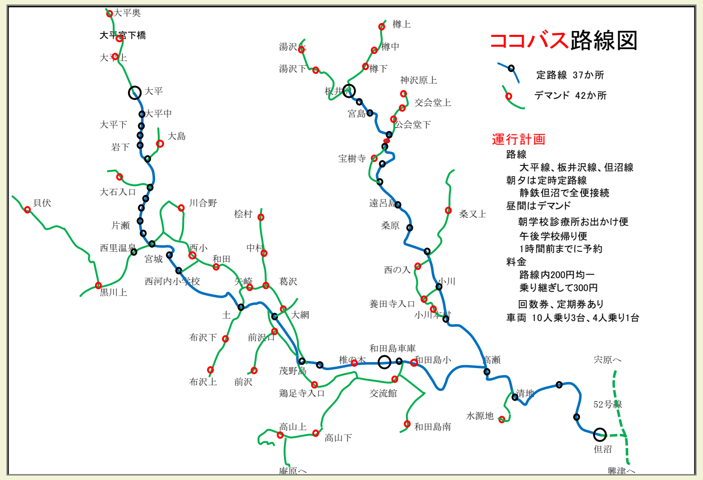
両河内　地域で移動支援！

高齢化率40%を超える両河内地区では、現状のバス路線が減便になり、さらに不便で小中高の登下校に使えるバスが少なく、バス離れが深刻になっていました。今後、高齢者増加で移動支援が必要になることが予測されていました。

公共交通の民営化については、行政の協力が必要不可欠であり、静岡市と何度も対話を重ねていると、連合自治会会長の中山さんは語りました。

両河内地区では「交通移動弱者を救う」「住民に便利な乗り物を提供する」「地元に雇用を」の３つの理念を掲げ、自前で運行計画を立案し経費を算出。バス運行を担うNPO法人清流の里両河内を平成29年に設立し、平成30年4月からデマンドバスの運行を静岡市から受託する予定ですすめています。

停留所は、定期路線とデマンドバスを併せて79箇所にものぼり、200mごと小さな集落にも設置。利便性が大きく向上し、住民みんなのバス路線となるように計画をすすめています。運転手に地元から多数立候補するなど、地元でも盛り上がりを見せています。



≪来場者も全員参加!≫

参加者は聞くだけではなく、各発表について考え、「質問」「感想・意見」をそれぞれ、付箋紙に記入。模造紙にまとめた後、付箋の内容を各発表者へ質問し、詳細について回答を得ることで双方向の議論が交わされました。

参加者も真剣に考え、模造紙に貼り切れないほどの質問が集められました。多くの参加者が同じような課題に向きあっている様子が目に見えてわかります。

付箋には、資金繰りや人繰りについての質問も多く、自らの地域で生かすにはどうしたらいいのか？そんなヒントを得て帰ろうとする参加者も数多くいました。

書かれた付箋には参考になるアドバイスも見られ、発表者からも、今後継続していくためにも、ぜひ検討していきたいという話もありました。